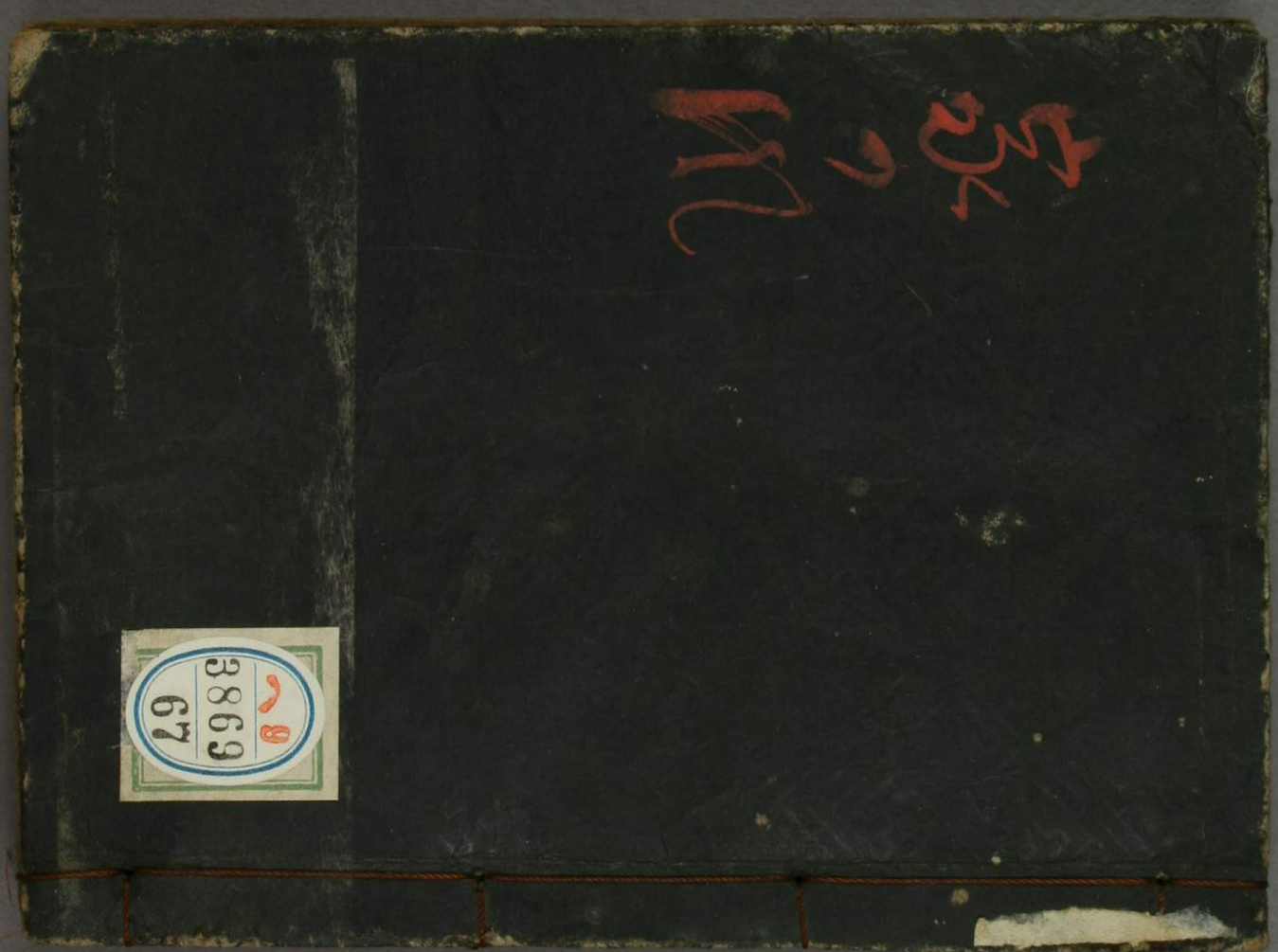

67
3869

# たいらのかさ所の風

67
へ9
3869
特別
67
111
利
3942
1
特
へ9
3869
67
正七年十月六日寄
王井平藏
氏曾

二ツ三番丁

是ハ

一

巻軸

なまりぬるとい

まことに

親乃

67

# たいらい かさ附 家の風

序文と口絵メニ三三丁

大正七年十二月十六日寄
室井平藏
氏文贈
利 3942
ヘ 3869 67

是ハ

[illegible]

巻軸

[illegible]

女房よかまれて閑前
としや表ちまくが志ゆらの後
雁ふしの布子がけ
地おかれ置じやよ記さしやま
まけがおい
義太夫（和撲の行司也）とも也義太夫と
弓（きつ孫つきの心也）ふ極まつて
通羽がおくだくりうやと
ゆしろい
まして猫より死ンだ（三味線也）猫

ひさざし 抱ぬ酒の酔
まもや反うつて何ンとする
火がふりまぬとアス夫婦
（同年の夫婦也）
きいこし
わまけ方くるハひうし糸
かくしとアシ 碓とア
母の念佛よる此怨仏
内乳母此ちくの如ぬいぬ
てくりてかくおつとよし
（左の志まざこ）

おくれあげまかぎ乃あ
いや又花に春ぐ氣末
毛虫が蒙ちじやあげまかぎ
「紀とさして云也」

心まれ

まつくぬなしハ一銀
ひさげの名れ四うか出
何無理ぬうす見れ
虫も殺さぬ蟻如子
まるいぞや
今度で以上十くりま

[illegible]
[illegible]
いかが鬼でも氣まりき
よろこびよいてみのあいの
尻れ下からかうまの二
「かうこの丸き二」

氣味まるい

りのじや[illegible]の
も[illegible]と箱根買
久さりあとかしすんかすか

たちまち
鷲のはくかざとりてござる
「金高こう㑹ありしらい（利かや）
さりまる奴子のそらぐわら
七秋飛しとやしく
おほのまをすちのの気（山王祭のこと）
地
仍る寺語状如件
つけてとく
あし抽皂菴よめくりて
礼日の牒よ会はあひ 蛇



猫ちむいて
お仏芸わぐもかれまんま（永観堂見返り仏の様な）
色そくしもひしく富士
かおいや坊ンと盆去座
賤ハしがまけるくも
萬やろといふおやまさ
小荒よ女房二十両
むろしい
ちやりりかんどく御所の内
寺小がなんとせぬ死人

城ドハたへのつくだへの
矢入レがあると姫乃子
くらがりずきにねんやまひ
ゆうざうせまい条まり
たりませぬ
壮 ぶしやまだまあ一ぶ
（壮とかこといふ人あまだや）
まりりかそんハちゑ又珠
山指よつきあぢねまけ
日無常ト てもすゝ衣
あらたん心ん物うが蠅
七人かくまやすぐやゝ
まくいるす
て板さそくあるゝ廉
橋ハかけぢに負ましよかい
子中となして紡とりの
（一密まゝ也）
四十九の餅まめさもれ
（卯元の餅つきゝ食のせがしゝ和し）
ことまりなしまは山かむ
壮 ぶ 松ぢけどいつがまあ

あてルるまじや

切てあく板と鉄の脊板

刀ますまゝきまゝきまゝき

子とせんとそくづかろ坊

物種伯父が鐵乃草

りし今の鐵ヤアまことに

池て板さてしよしめが

おのあるて麻の鍋とおめるる故絶也

ようおまゐる

私行の根と流まゝが

兄めがまへもめんがくない

どうしても

後生残しよおやお寺がた

酒屋の門と二日坊

あとじやいゆじかいつたるす

まけ祢じなるぬやあ母さ

如房まハ志りじいんで寐よう

そこくく

あるそかろそと尼どうし

去ルもいぬも此 浮れ

猫がちゑみなれ川

すくめうじや
雲行の子ハ佛がさり
出しごよしどのわハしやませ
いや火とともしこれ知らいこの
又きへの出 芝居がか
おまやゆ干行きやのどが干
いりしやまと
どらへしてもを登場れ
たそ世捨てもあがまま
富ぶるまひハいつでやを

ひてやる
などしいふまハむりし此意
こゝ男悪ぶり此をかゝる
ろくてくおなんハまあ
こゝやまこゝくぐりまさらめ
是 兵 変じやかしとうかあ
何ンとりし
のふづかりのふしの山
どこふござろぞ源此火
よう似ませぬか二子山

笠の紐をとる待てくれも
何ンと二判か連判の
称し三夏(すん)をまるゝ氣じや
「東山りどう茶屋へよる種也」
じやとかても今でハ銀が出さりませね
とんでもない
まあづう一番ハ平るゝ悪
すりやかんらまといふ夜番
りまずとうけ
さ何稽公ゝのあるもんぞ
(莫の右にて盗いかとも)
坊

あゝ志るのか
すてまさ行り山 辞・乃 杉
留ちといふまはくつしやめ
皆解ひろふは 私(ましに)いのち
是ゆゑ 陰(くら)をまつりハかへ
人ごといつぐお 菓まいを
清ねひよ 玉 の 汗
せいもして
そもで寐ざめがよいれ○
かぞんりけしろ夜ッひと夜

よいいいの
柄杓で掬てもさらし乳氣
あく　たち　結
俗の字海れ神と　の　日　きの
だ　さんへくいぬ　たとへよの
教よいさりの神と
ひぶりまのへまのへ　すもせん
夢礼　ありの石神と
はえとりと　ぶて　おこぶつはさりとてハ
松茸狗の神と
軸
おまや田　つ足　でも　塩　思　者
見こなかの娘宇蛇の場りて見せ知るせん
ぎつかつ　なれども

ごろしやませ

無常じやなかいかうりべ山
やくそんでなかいか坊主蔵
比丘の蓄宝といふ今
花よりぢしつ志ゆしつ見れ元
稀の稀と与次ゑへ礼申す

あしつけり

貞女あ夫にどうあつても
おりひ人相 二合半ハ武士の相式也 三合半
生かべどの と従 聟 聟
「生かべそろどんでやしろ聟女のことへ」

あるゑと俳でさいぐまい
志ひを せすそれ見るす
夫なしあの妻房と坤とは食じやの
「妻房ハ足のうしのめしつぶたとへ」

同がひうり

でも行平のゆりひりの
神輿とかぬみこしきこ
稀のそこきと見る 舞
すがれ 東と浦の花
「くじらつきの花也」
城山 崩と 船治の弟子
めしつ 神之

何ン姫と

石臼(うす)箸(はし)よ さくすが 親

妙が若(けまや)わきから 横(さん)

「幸中の為也花」

まあ 鼻の下 花の下

さあ何そだされ 客殺句

もふ付 足よ 罵れかく

馳 只数ゆゑ家ぢゑ原にもくさ秘世中よわんきりハ

立さもとう

犬 骨(ほね)折て 鷹(とう)と 鷹

蝶や 花や 志きみの花

蝶や花てうあいのかも

川向ひの 慨(き)氣 何ンもなし

むしハ 奴(やつ)な 今ハ 鷹 花

又 りしくい(息なき)が ゆゆじ よ 後

馳 法花紅よ 如なるだ 太のくそもうへ 如ぐ

川 なるを

何いさ 乳(ちく)房といと 根め

さがりじや しくてじ

「すまふのていこ」

火 花とちらを 火吹件

馳 侍の娘だでハ 如いか。びろうな万か

さあ しかうしとかさうぞや

志だつこ縄とぬけ来り
涼えハかんは尾とくぐ
川の中で尾たぐのこうへ也
袁さしくといふハフウンあまりの
袁さと云袁酒を楽て月花を楽ぶ
ちまつたり
とまやまつ坂の笑ひもち
寺の白大めに小豆飯
あつたりのめ懸田寺
しん食ノ往来
どろめん足袋は志てのけ
他
我西の梅れ花とハ尾てれども
大家人ハいていふん

よろうハ為へ
志げうハこなと命ぬ様
定家といふてもなあれ
なまどもちしるかくは鞍
ぬつても抱こもましくも
子とアルる計も三文足
ことなしの女三文ワさそて尾せ物をせしを
他
此方もちやんもないが志ぞう
入りますす
がくやで銀とかしすなる
女房といやといふこハ実

ひッうけて

後家立さんすり 古代

貴くしいがまあ 祝ぎの鯛

てうちん柄ふとこあり

すんだくやこのくろうな義

孫の扉やる耳は 陳数

りしひらきしくそウがなくウシ

とかりこるていこ

まあござれ

大師ハ 師じやかうこ来ろ

いまもそなたハ 解パせ

いと海の帆れ 隠りいの

一字也 さすとこ太ユどの

まてまあ。まのあまゝあ

居間のぢごさ也

さあびしい

稲荷塚 凡まやわすも 菜

常りやりあとも 遠ひ 鐘

海東古道ヌ五七月十日ヌ 雅楽すりく

むくあしづけハない 内

内のうすく

解さめてりしなむ三 蓑じや

おじのいやらまやのうとちやま

つきたがる

とまりへたやうにしてこぐも
あがあるくらや　まつ庵
は伊勢まつしまは　薩摩
あんまりむごうあるものの
ぢ廉坊は　みし　ぬり　ぬ
ないてだ　坊は長ちんじやあい
まとあつる　（堂宮山之　坊信よ允　食の付　祈之）
くぐけて　獨　よむて四ツ矢
本田の小　（角太夫ちのよりあり　庄よ　必まとあつる）

是ゆびゆるゆる小道　まやいのう
どつらひ　ひしめ　宗様いまやせぬ
九十　六　みあらう　ゆ
（女房の髪　北　まとあてこう　祈之）

くつろいで
お宿老　西河へ行まして　君
（一町の東江行と　咄のこう）
で　ゆらゆる　御　寅　お
帆とあげ　見でなしめ　機嫌
椅子　酒　義がさうあるが味噌
女房　まことのハ　苦　まい
（よが）

問くるあす

おくめとひさしぶりと意
修慶に絵るぐういぐい
あつかひせいてま。ま。ま
牛がおこつて竹格(がう)る
柄杖と氷とまぶまけ
おかさき女郎衣くおかさき女郎衣ハよい女郎衣

地

ハいてかう

四もあもこつハ古狐
かるに郎(ちう)縁(へ)と地蔵鬼

御前が鼻にや入るもあい
死人焼場の事也
大坂中の女敵に石を入ば橋杭之の掛り居中也

雑
せく相じや
盗人。しそこひざりまん
手覆にあとまも一つびひ
是居りり是大まさけ
そもし是ハどうでもすま
ゆてかうそうれ一番湊

雑
そぞつくしして女房しが
ようハする
自判に鬟とまおんろく謎銭
一旦あるで
天上毛上の猿誇り一旦あうてくたこと
よい流がさげりや繋名の出
さんでどの話も
すくけもでとて時まいる
女郎の文書かくさつる
かきづいて
訳通を大坂出衣
男ぞ女人の内之
のち花とするおとらかげない
せ雑がたつさ一やある

よ母爲ぬりかよう治しよ
よ意が今でハ傳(しやはん)殘こい
叶ハ称じ
大夫と見ても何ことも知ない
かごの事とハ出なんや私
矢敷よ是もけがと志さ
すなハち二月十日
(按字ハ入滅也)
りけをしぬ御寅お
(ほ)
御京へ行ハ氣をない大だん
りしまいや

子(ぎ)ためがさきへが十会
口れらきすかしきめご
文字よおしてお方達
おしへか称てハ思へつぶて
まて用心のよい戸(しと)の
やまいるす
文武二年れおさふひ
りゝ是ハ二そく三夏の世
家賞しぬり東海寺
(東海寺ハ家下座の所へ)
酒屋りしなしお国とかそ

花ゆづくしとねやじ　寝
おだ松といのねぞい　なぐ
ぬし松も来ぞ葉も来ぞ
世ろなことハ和ぶの波
地と無天のつりしめ
あまも見ぬがちやうしをろ

牡
そもめじや
乳屋ふめつそふかあがいも
藍深屋ふてんと命と見
あい屋ふ見ぬぶらひ　とび
たぶこも酒も菓もきらひ
うきと祢らふ思もかぶ見

ついてゆく
たすけどそして川かぶ
来テ　そ　絲屋　ねこ人
ちなしこ為ふまなしこ氣
髮ともふ乳母おまんくさう
死もうれしこ為の氣

つめていは
あまや寝垢離り業人ノ

そうじさしをとりはれば
鶴髪四ふがあんじるの
なアむ浅間だアいがさ
もうれてこがる
さい浅ニ鶴まやぐなやつ
ひッとりひとりお通夜の名
うしロのかいぬやまたら
孫ふけが浅くと家合名
言葉あまのけしや里のかし
地おアやうどんよりそぐかよい

あとを尺る
かのより面さのむかん管つ
ぐんぞ四きてないりのそ
冊波口かしあ　だなと
[illegible]
あがらくりれすんどあ
時宜してあしハそ新えんぐや

あぜまやし
後あとさへいやかうだしい
も我とが　坊をくさい
もいけますとさもり恋

は智あてルとものてをしへる師
の男と成て先ハ説を清
何しとせう
きゝ形拙めもぬうふ釘
いの今さへあまや浮求しやの
ふまてぶもぶもだまつていさつしやい
せうぶんてやぶまて紙子のぶん
ふりいぞや
そうまいは別し 黒小袖
やツちり坂の孫づゝ かき
[illegible]

ちきんぞ拙ハかへり・花
さうなとかまだ さじ まだ
ちと又 [illegible]
きゝ形 [illegible]
きんぜいの花 打 わるく
おわうつくだ 棒つくふ
うけこいが 直ちやもしへ
ゆてハきつ孫よいかりの戸
わうげたな 数 此 一 ゆりひ
着そどの和ますよの町と志よとしげだよひは行ます

軸

酒のましや

いやく菓でハきし　ぬ書

二度めじやあろと牛をる

（如来すびしとん）

潜匂すりめがいらみ入ル

猿も来かしじや　松が煙我（けが）

がこ餅くても　宮ま成山

（りこ）

親紀（ぢ）が。やあ〳〵ハきついてア

（犯也）

肥

きゝぬりの

ひよいと　ぬとろと　仲　牲

紙子の　頭　しや　庭で　槌

（今里ぞちきうさあいて）

や板師 清とむかうもの
ぞ悪くこんじ 瓜のかを
ゐきのふれ 見物を 此見物
宮 宮 治川の先陳我なりと
もうらくじや
日本 廻國 六十 又 紀
丸めるりしハ 三 男 場
帆さへあぐるとたぶこの所
高ふもふまれぞ牛のみ
さあ あ 事へすして ふも

ゆんもしか
ゆしろへしても九人 親
しやくしの志るまでいなかげい
ひどんを付て三くごりま
塩ふますせてもやけ石ゐ
まけぶしぶのがさすおぶう
とつくりと
二人おくてかまやぶさい
おさまつてかし 大平記
しくもしてかしちごのまひ

すきも火打も石もよさ
霜月朔るゝ靜ろ仕ひ
あくらな
いつかい尻の退て 詔
つぶてと屬が何ンと聞ふ
ゝのハ申されぬ 茶くひ
で 祝かぐじゝ 咲て 梅
打こんで
去ル人の 無 九十五夜
焔 魔堂でも鬼ハそと
うハがきまといのら
ひッこ 鄉のちくろおら
今ハ打もぬ 小 雞ばやの
うりませぬ
とつとむりしハ三子 湯
さあとゝせど 鍋 所
万 灯ぐいやまめ万灯
ゆてハ 鶯 鳥 お 毎 歯
性のとぢしめてこい義
をせげと 追付 ゑんが 神

よいこ氣味じや

雅(うり)のされ(方ふとみのたやりてつくしや)ゆりてはすむと十三人

とんとちそげと心りち

よめりはもろこむかひのこ

まかけのがきが あむおもこ

子ゥ孔こうとや

[illegible]

女(カ)屋しや 咄さぬ孔ぐ

こゝ時ひやでの(はりうるの)

かんどうしてもおやのぢい

[illegible]

しじや 嘉(まくハ)楽(東西瓜列とゆそや)コ判がなか

鶯籠のかしかしひぐり

[illegible]

[illegible]

いかさまにぐみゆきハうつ

ちと此用きしや 常(じゃう)稜(とうぬ)

ぢ(そうぢ)が さらと 茶(上茶のこくさぜんたうは)

[illegible]

月がたやい

至をしてくふ 見物との

こハがくせは 光ッくぞ

るがいでくぬ何ンじやを
としがひ祿くで思(すべて)の末
津でも 罠でも見えるいの
「世界中で」
あるあるづか
まゥさうあまふ櫓(ろ)とおもの
もやん賣どの口れたる
ぬじよ菜くまるまんぎ[illegible]け
きハそうすすらへりんどの
しあくみいんぐあゆくんなあ
まゆあいんぐあゆくんせ

まわしや
実(うんと)東そへらがくさむもび
あまらや何も の 去れ
声から廉れふんまでも
耳ばかでなくほろアつと
がくもちのかももきの花
よんてみる
たいづあくこまてわたしも里
さいくよあつる 砲(でど)丁のむ孫
ぬやのいかんよたくみ乃目

一をりのみこれちもかゝるを
つけ髪へ手とひつきとの
[地帯之]
もの哈のよいぐん那祇
かさこるな
祇此カしにも風此神
炙すへもふよいうしこ
しかぐらをてあがらんせ
[炙のてんこ]
泣ふもがいよ男此女
かのめかすまだたいぞ女
つかう一蔵ふさり蔵四

ぬけたがり
母夜抑ふて見んがやあとさん
[寄り条ぐの祝りもの]
かいしやうなしがあむ大根
丸りのとうとはんどうと
しりまき芳がひつきあ
それでたこ祢ようまく祇
抜
[ぬけ]
抜徳仕者娑て為二曲事
わひまりせぬ
せかかの抜がつく井筒
とうてたりつておりしやのう
[祇ようしたよ]

ちやまんとうまふむでいやよ
御りハまでしつひらくさ
アイ月縁でこざうせす
ありゝまとも、一トツひとく

〽さわぐく

地

わくふでさうざもまします
むかんとおこそ乾りどう
事がよいぞみろし。根
あまずハをおしやいのう

地

縁もまで縁がまとろお末

〽こうへてやる
鼻でいきして髯を撥
坊ンがいやこそおおかンよ
世の中もみのひるまうまし
私とくへどいふうれ
お縁でゝ背中へやを
あくものじや
まといつても此の神
おふくろといふ女房
女ごひまでがうつてがらん

御原べかふぎりんないしやう
牠猿がきらふがとがでしあい
ぞうずるの
まで女郎の辭おさめ
のうでも極月とわぢすや。
こくうよむまいうしでが娘
是ハけふしたかゆれ下
ぞ矢橋もよろ足やもめ
そうとゑんて
三門へわがろやアとちやま
ちやつと能の石かぐしやいの
るけわげこあるまゑぞの月
てかめつくしてハあの月
てあこごまいりれむかぶくまし
牠てゑんせくうじけあうでぐりますす
あうあこ
又の御ぎんし　河枝
こまやまゝのりとハまさんまい
名も高雄とまてぞハを
どうあつかと内のしゆび

わとをとる

つめつてといて親のぢひ
そうまいなまぬ こゝ市
ちてまじごすゑんはせぬ いの
おそうゆく 五月五日茨の木挿けいるゝ日中也 後のりと
さめぢやさいてひつさぬ

かぐしけるい 此 かぐしのはふ筆 何色でぐりません

誰かまことより言がうそ
足のされをあゆじ此 歌

異とあしきぬおもし此田
猿の口へおて 「三会のはてやうていと 鄉
言が代なれやふとゝ事
と雅て所はなどやどの

あくせまし 此

まあ色ゝやいの 此神
わとりしるがきやんくく
鬼魔すり婦がかしの
そんじりしんでも 獲麿 ごまくの
よりまいしつゝふはかしら此も

よいものじや

何ンでも初尾まあ見れ
いウそふとんとまツ悪門
夫とあがめまいらすの
あかだんごから坊ンが云ふ
火入の中にたきおれ
つめたい足しじやわくやうじや

地

おものじや

なまつやや拵弁も何ともない
奴子も意しやぐんまゆりと
書田のぞけど孔子くさう
ふつきんがついぞうきんに
ふんきが後すやがきうきん

ちがひます

くそく屋の氣と殘屋の氣
町ぶりまひの田海波
同づりひがたやいひ石付
時紆ハちッとしてかだん
ちゥさいとれの条のあと
あく重分ながら京代

地

きたがる

もいりへ取らずくじ見すひ
矢数の色どりどうでやを
うゆく見てのいこいしや此口
三の冨を行き所
法ぶて打ち氣でよめり此晩

このしまじや
かくる太夫まこ見や場に
隠居さすると松を助
つき山猫のひしらい程

女房やんがてよぶふよが
すくいもの
御色の琴此人色あげ
無くらどのくお氣に入
恋の中でハしゆくせんこい
あんまり中のよいめうと
あげやへもうぶハ法ぐら

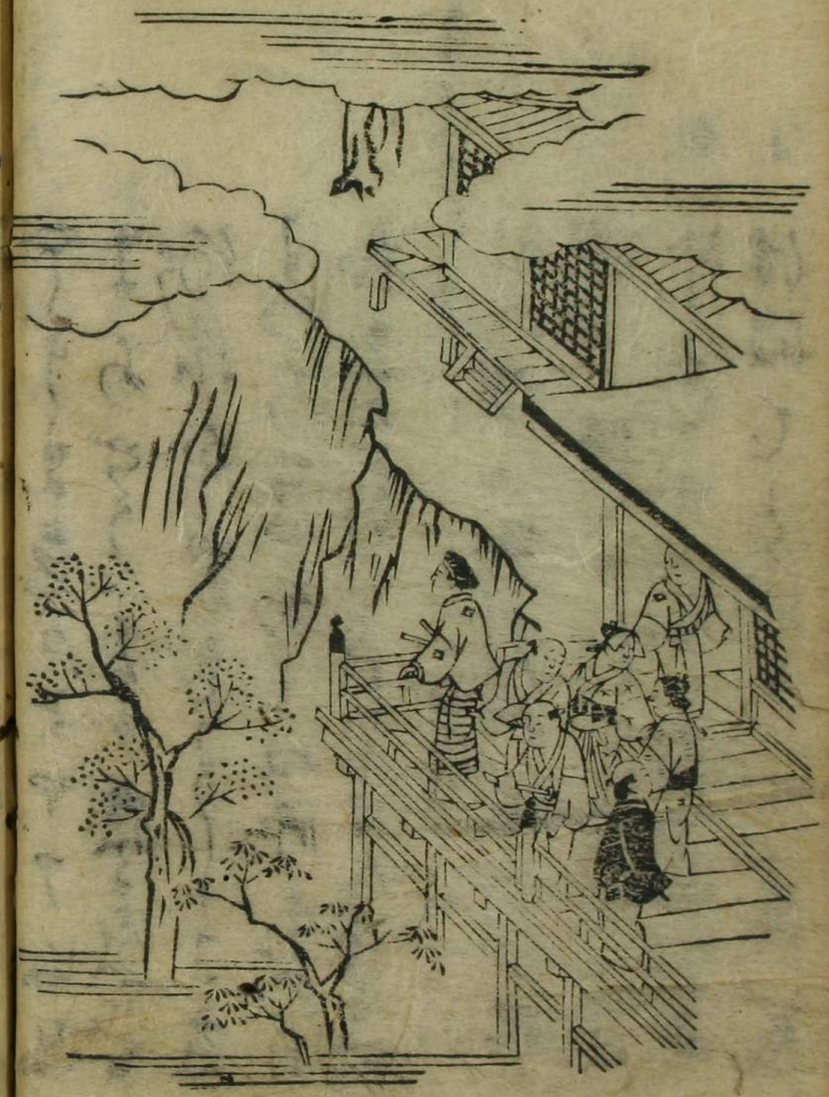
ようでさる
出来がござる恋しらず
言くくれも臣も臣

今ゞからおとゞも奥ルゥ尼イ
人ゐの男ま　そん　を　奥
他　尾ちらやまずてんやまの
とりまくい
火燒の　まんぢ　いつかいも
（神の火ゝきん）
やけ　聖く　雅ぶるとうおもや
仁王の　間　さへ　きゝ　しやも
（盗人がれしらぞ）
アヽ三ちんじや　薫ゞ　いなわ
しづまりまへ　エ　かくぐよう
ようなつて　（ようかんどん）

まつしまつまい　我笠を町
（きゆん町むしまつぶきまてぶしとも）
どこしらどこへみらのは
奥丹波でも　鬼ハかい
足ハかしじけを　るの湯
伽（とぎ）あてがつて　隠　居れ氣
他　女房が　わて　まてといの
（女郎也）
くふものじや
かうづきかりふやぶまてこの
粮（かて）がつきかと　ぬ　まれ
めしうきめしれつめていれ

敵(あり)と河内の本郷黄
地 ぢ四うん さいハ しし
ぢゆんさい黄と何よすらやんとそゝものもちぞ
かつてろ
なぜ西国でゆくぬ月
月をくく何ぞ西国までハてゆくぬと暦よわきこと
絵るふひごん何ぞ りぞ
あぶらとらいでどんくさい
さあ塩やくとゆんしや 舩頭(せんたう)
裏へあさぞ菜のむまさ
地 まんがの 網(あみ)は 助びゆうへ
ゆせさしやを

やうまきやるとやア 母拈
まあどうするぞ猿は志四ぢ
何(ごん)拈な男ぞよしは無
まづろちやなるぬ師光の日
拈志なげいてぞんずさ
ごうよくは
さいつハ坤もひ 地蔵拈
田が照まれて毎やさめ
な 坤とて可(か)拈もあるんぞは
よ は彼でといと一 左 所



まきやりか

清の様ハ 元 生 縁

無しても なかいが味噌つくの

独がしでも 火をとらし凡

さあ矢数じやといひづくえ

とうふのひりあえぐ様

牠 なアにごつちやかごつちや

まちつとしや

いハしやまやおこまことしの目

もぐさ無げとかよハいらす

墨の人形れ目りらと
む尾あらそとあくまくよ
まくこくり明むなり次第
地 庵へかへろぞ 「玉がゆふ祢 十女ハ祢ひ」
のぞりなし
ほしきぬくさと幕の内
来戸よハ明れがなつて雑
卯 服 辰 股 寅 背
男で何こ此さいハい 達
まきの下りし 辻すまふ

ごろじやませ
きやうがん 繚 徑じや 内忌の場
仲 人の目よハまあ美人
きようといものな 庵 金 松
れ あらげれ 地 蔵 松
「池の地蔵とそれ」
雑じや 木 根 に 死てんで
ちりしろい
よろて也 吏 にあげや町
さろまれりてでたるさじき
かんどうといやのふどもの

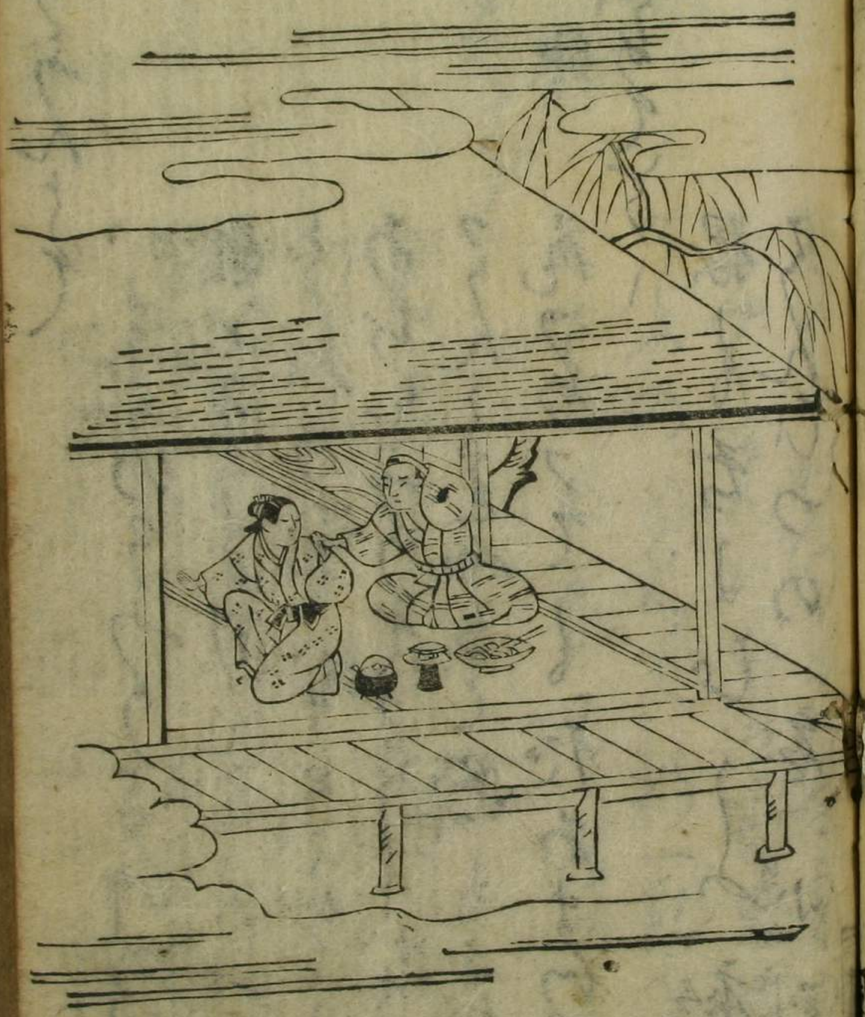
柳し叶ハぬ耳にぐれ
いや鹿そ村の穴村の
ぶしほとなげるまりしをき
まそやりぞ
和尚の爲るに今此もの
で きりめがかむる田村の絵
と 紋目をだましくゥさりて
おしゝ程鹿る矢数もない
さうなに猫が目八ぶん

祿ぶしなる
男に火をおいてよりしぬ家
かしぶりの志て日行程
取掌ハうしみあつきハ
ぬくをしらがのひざ枕
かんぼに是ハ其里じやの
柚酒やのかきおしあつて此
あらしゝ家
裸るにとんと家して尻
ぐまんぐまくと火焼家

鉛がわきものであろういのう
麦よりハちつといやな氣味
江戸へいたそくまうぬた孫

まごろいなあ
鉛持のるれつかいぬの
目をあけてやりいイろッはア
ぞくく助言がいひたいなわ
ねぢ切ルやうな此しゃ
ちやつくりちやつとおもぬかん

丸付て
女房よなるさ 鬼よなろ
黒かし黒へなんだよ抱
いやあぶらげのまた田でのよ
よういびきかく夜ゆ
能松院の御くろな義
ようおきさざりよんごきハ
ひつさげて
抱きしずどの苗ぬましよ
朱さやで極れきまひ横



ぢぶんとて
かまどのくろうしの刺
鰹(こい)とそしらけじさしりぬ
どれなへだハテさきかくも
あぢとやりてがさじかがん
こんこゝやると笑もうつ
尾つめッてもだあまりて
他
ふめてとく
根も老よむしふ廉
ちんびつの庭(そこ)小(ひつ)の剣(たち)

あまかりえぬあんの成
きゆくせんおいが言葉だち
くふの目ふくし乃一乳(つち)を
忘てハ出家ゆかきのさ
他
まハさるく
老君これだしさし坊
けがのない矢ハひつこぬ
おうもひ也うりたアなだこの
「面根(あの家人形まつり)」と出ぬとあくあくり
「寺のわうだ」
きせるもがりの一ト志あん
「くだしの目ざしを」

もしまくい
やまぬいてはいふ行燈
往生をふの表そう藥
さすがさり前と昼日なか
つが祢て殘ハ大ぢん気
まさかの時まやつとうこう
他ってんく面ウ白ウやと
「主婦の絵と」
きどくなるけ
御堂へ流まるつ見ると
あのまゝ何莫飡が夜精を

鳴さへなりけだよめがなし
「とおこいとなく也ぬべし」
比りみて御庭ふまぬのよ
「六条也」
まいわさちうじへにえへとの
「なるこ」
まるいぞや
よいといふ乃が門乃ら
「大坂也」
もう仙りんりら女子の風
帰なりら坂が狸寐との
何喰いでも精を日
銀呼るりらかくでのまへ
他よ
まれかどかくとぶつもるない

ふさがるゝ

百性の門（ど）蘆（あい）たゞ（あいをみすれ）がい

お門義の口二ぐぐり

糸の（ぬ）虫（こぐぐりま出かゝる歌べし）がなりもや一つまへ

そしりこゝにも向ふ廉

どうしたまけか神様ぞ

せろいぬの

宿（しゅく）こしや銭（ぜう）も無いぐらく

まれ舌（ぞう）こゝらの子秋らく

いなりまつりれちいしかゝ

えかくい

かまどいたゝまゝおやじの氣

我りのかがら大名がし

かゝ里人（どと）着（ちゃ）と食（や）を

宿（やや）暫（ぐ）しくといふやちん

なくさみごとでかしこ銭

地 桶ぶせと中へてもおやじ

めいようじや

枝（ゆく）坊ン様もあかづくまん

すれ毎乞れか中へまけ

こしかに答へ入しさハ瓊
多でもとまる火もとまる
たつさ一町又きよろ見ッと
地　まかさ付がかかしもかい
ちうしるい
去ルハさつこがあだなまき
お銀かッてふるやいこ
みうじもさんもたりまへ
何がやすても産ごあと
さがふあづけてわかうしたさ

地　まかさがなかなかなかしや
しさいやう
かまえぶしの鼻かむ頃
ひざうあふぎで朱ざやどの
御所の汁すふ玉様
初頃のむしとちやッとかね
あの人よりハちとまよぐるい町
地　あまでも此中くるしやさだ
ようごういの
こしうな着をとんまるま

御前が涙まや氣がすまぬ
まるいハよめのまゐられ程
まんづゐらう祝へいやい
のまちやまやどこのも面ゐらん
ぢらぶくくとぬらかいか
まくいるす

地

かどしも廉の角と蜂
ぶりちぐしとてまづきん
やすいかもじやとおもさてぐ
たんをうぶらざ何ンであら
けもカとゆらしくれ
ふきちやちやくッてまんまゐく

地

ふるいぞや
こゝりへとんとすのこ形
戻ッてアルこれだ志じやあら
氣やいがまらう祝やまじやが
さしてアルまゐ行ク思ひまい
是でもぬまぬがかうしけまい
きのふれかもハけまやおきや

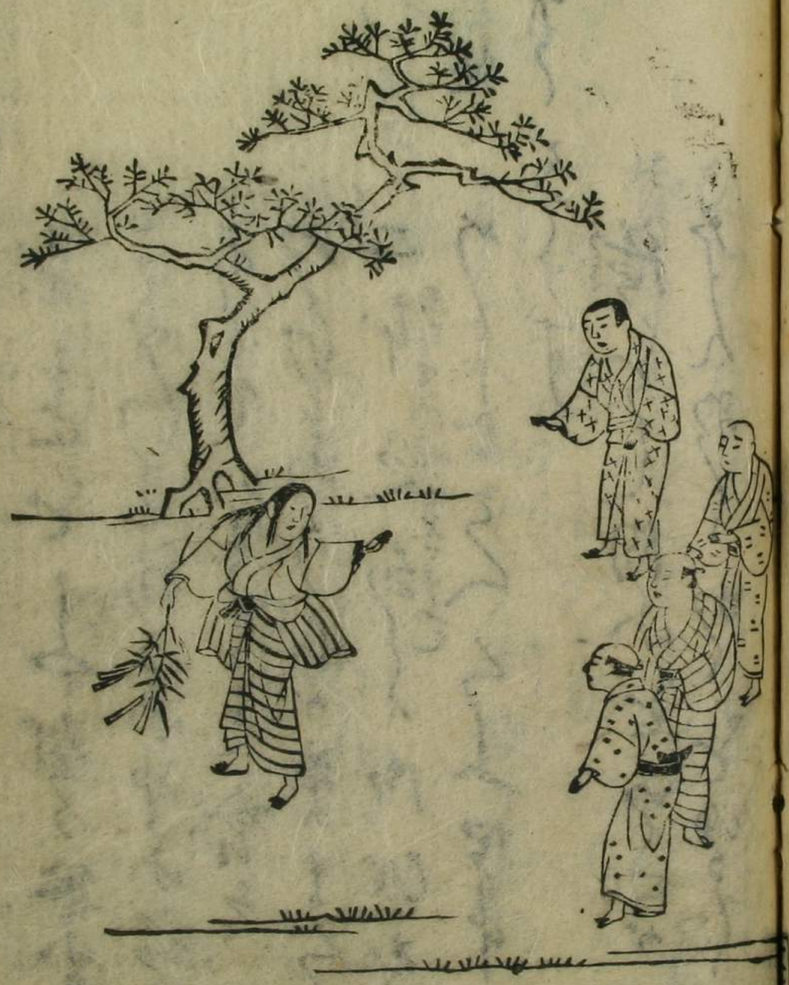
地

きがついて

むすみいるしてゐるあいだ
そこが此神のひかし縄
やまくもやこうれとの
なあれらの猫が大三十日
まが男とつめる見れどの
此お盃それへ扉アノむすびませる

牝

あがつこの
何くやうやう女房ぶり
ちや山ン門へ陽氣たち
石りけ町の所ゆひ



かたいやか
庭ことと しやぶる無ふ志て
こゝろ様ふ神ふ様るの
あとでハどくを喰そ ぬ
ぬけ氣りらが業まくら
二本 三本足の姫と天下ゆしこ 陰ッ びぢん
めしどこへくふ日本 徳
地
そしてすす
猿とぞ内ふといてが 渡
なんぞかくとゆるぐ 梳

ひつた 瀬のけづりあぢ
背中とかくがおらかいこち
一代 蔵 主の 粉かつら
もう又馬うう 小便じやのう
地
たいぎぐら
笑かろしどのみうり 笠
家りりこのめどぬかふ汀
女房もけしまして 車
毎日くぬけ 衣
岩ちんやまだ北斎ぶちんとこだまる
地

ちらすしじや

塗人といやがらくく

別は氣づかひなきよ戸

坊小孫てゐまや同ざ家義

塗ましまして 蕃乃 榛

ゐかど積がくもる 意

ゐてハ兄ごのわがりぜん

地

なまりませぬ

ひよいとさざいと山乃秋

是かど石うりまありハない

かう 盃へちりて 取

さりとは是ハたどころふ

こゝハ七 火てとこハいな

ようく道中ちやまを松ね

地

ちるしが沙る

ふざりめし 秋の山

いざかう 茶乃 猪い

此のうまんな二 文 人ハ

いやんなゆいくろい 乳

麻ハ おまても 苧にならぬ

かく留つる

は小町の十二ひとへもの

は氣とくまぐへれむくりへ

ぞめしこれをゑかげら

ぞ女房もらやつて孔子くさう

ぞもうだやがへルと大根を

牠や鶏柳は加ルとのどをもぶ

としまたう

志ゆう孫も笠もふじおゆ

豆めし 陰もさいふ ぐら

猿まことのがなゆんと宿

まさだじやとハしつてまこそ

ゑ花もりてよりまいもの

志りのぶんをとぜ 切 通し

「孝町二条は町ゑり」

牠

ぞさうなるす

鉾くて宿ふ 綿いし 指

ゑつもの 縫めはやあッ 針

なきて此ちぐふよその墓

鉾がなけまで首がかい

切ルらうそく乃心れやと

牠　たそうだんなりの七ちどの口まで云すうそまやぶどなり

かるいるすじや

あの帆だしらと 蝿庵人

御ぎらん様で 「ぎこ兄のみうしこ」 か 和様

そらすうどのひようこすう

なげいもの花さすが様

今ハ 九義長 税義まで

牠　庵人がお十会いてきたいと申

まするヲイいこぞ

せいとどす

とくとくれどかくもかく

蕪て師 老のかくごよし

まさかの付ふ 旅 ちう 泣

かつおしまぬ 網心

坦ふんで うくさのまま

歌れり 後思 「是ねの様これこうどうせ」 留 貴 もむ

牠　これまする

よめつて来てもとまハ看板

狗でうり 奉とさしでどの

をなぐれしるすいつとなく
婦で抱かくぬうしをる
わしハ女房の名だッかを
まんきじやないがさいりんめ
「びなんぬは女さくはあつまる」
まさッしやを
今こそげてハどろこ坊
まそバかんろれ[ふりこと]
ろんずもくふめしもくを
とくまやせぬ死むの山
おまや今かくとりらかく

正
恵か
それで布袋のよ孫んがない
「あれとさしていふ」
内でハ芝居おそいなお
娘あげけり氣こゝら
神子のいつすまこまこと
けッくち事れとれぬ元
ぶんない小僧くいいやい
くろうたり
魂みぐされだ死おの旅
いざくせまへゆんがだく
旅はくさびまとるていこ

七さとうみあがる時
ひなこおくかいとしもの
お針乃かくれいつさせれ
ちやうちんのふさするいやい

牡
小きみよへ
同じ人でもとるごの記
三箱がるでどこ行なお
眞あ乃 椽ふじでッとい
いと仕乃 此尾こうぶさ
きうしいくとう般んどの

用心する
石地蔵アそ何ものじや
光ん蓮がかもなし山
何ンぞわるやしるどうじや
鬼門とまりつ 建まつる
臼乃 ちゑ ふも大坂乃ね
石とうこすやとさとるまい

牡
こまやなしぬ
桃栗 三年まてあるとぶ ゆりひきろ
山下京といひえ ゆろし

尾などつめつゝやうとしかいの
あのどんくさいがぢやう本板
めんようきハまハ菜かべ
なきくアんンす餅も浴く
此匂が揚(カテ)まやもうをせぬ

牠
きふかゝる
酔が覚(さま)るとうしますまん
ひざりまへじやハやイ坊しよ
ものめけさ夏みよさと
ちろりは御しまためしハない

そうけんの口かりないかい
肩かゝるのぞいてたりんなや

牠
あ方が
まぐるい野の麁(あと)うあと
ちゆうらいこうじてさよ衣
えそへ袴ぢむくまアぐいの
まんが此やうふさぐり足
てもそれくさるようくさる

牠
あいづとアんゆるのこいやさ
そるすじや

それでそも矢乃御月心
仲人(なこど)は後まや尾そらへ
狂言じやなとゝゐるハゐる
垣をせいとゝそこれるす
涼でつけがたらいでの
ようなんがもいらなんどハ

心で詩

よめるこハいといふハうそ
おやじがいつか石うそ
来(たこ)うかとわ[illegible]の七ツ時

毋ゆくつらうよう房(ぼう)た
たばこがんねかよふ紙
わらゝ程なるかむ大(じんな)也も無

かむのみさ

とんでもぐるんのけハぬの
又おめでたふあいゝ乃町
皆あのかざふ[illegible]ぞいの
姥(ばゞ)先んでそく菜・塩もない
諸中しもそろくかけすの
よしげとも高よそうやさすハ

たかしたが

御お家ゥヲヽ俗ゥヲヽ
此師老ひて喜ふしん
志うとめ菜まんよめちやまん
たらつゝまうして濡ミを見
やつて志まひでこざるいの

牠

あらう夜九めたばアツゥ里
ロとこさく
取化中弓での文珠坊
具相ンゥヲヽ代ゥヲヽ

たかしたあゥ此めしくさい
かんだんは筆ぶとか京
何ンじや御前が面白ハイ

牠

かてがよさは志やあのがきめ
つとめとて
まくくと合をんンる燒
づきんめさうもぬからげ私
かハいや鷲ハひぐるい　め
こないようそとようハ出ゥ
ふかどのきッと称ず乃番

牠　あれとよなれてそアいたい
行ついて
今じや我らがかごの鳥
たいかな文殊もちゑれ和
穴乃あく程ふしの山
あと面んどのが品葉がな
渕でぢやじやふむちぐさ
壬生からアんりもうらやしい
牠
引てゐる
極ふよしぬらやまひなし

ひつこんで
喜撰法師乃栖居ハ
うぢハむさ武士のいきやもいや
彼のう祢く猴法師一舟
だ がくやじや歌笑とる
しておかるぐハ三ぞである
地 念仏申しもおりし也かい
けりまする
ちもりしやつてのちぞさ拍
おかんわんと笑イ川



地 ことまりじや
源めでらんと醍能がわき
いふ駄どのがつてんがう
うろすまや鬼が山伏来
茶戸をこけだをしらぬ
紙師のらぶ市やたのわせ
みそ[illegible]そハ泣も糸ふ
猿めがぶすハうちもぶす
地 だ 狂言きてよといおもりまさい
[illegible]がないのでかんと町

よいハよい

が後ハかもハぬうぎいがき

がのまゝの日花もすまの月

ハめでたさじやアルもアルせもまれ

ハまれうつごと綿しま升

がごうして茶とさげぬのう

けいたくか

まハアルや鬢(ヤ)師でもかゝしの

あらうしもあれまるい蔵(キズ)

まんまと尾がぬまの蔵

ゑんくまゝ志まひが川茶でゑす

くやゝ乃義理のりらい泣(キ)

どこへもよらずいなんせ恵

茶やまゝもどりよいふ朝心

入ルものしや

弟かの旅人立ッた詔

くハッくハとさくなあぶるあげ

いとしてちや唅(ノ)泣ちや唅

株(ね)あげてうしむ孫乃か

九十九日ハりけかッた

三ンぶでまびよばきてまへ

「かし銀」

かくまつて
四十七人
石佛
たとへ此法花は何がさて
て今じやどうしても芸どの
たいせかうはたしげのいやまやそ
めてたがう
神の御機嫌よりて湯
ちどり足をいなましか
かゝわがひの仲人嫌
ちうぬぬぎじ許の町

あんまり生きたまひ口
独無理よ与ぶがあらうか
むつかしや
四の字をきらふ只和様
人れ人じやといふ身持
神の末といや人でさへ
い戒たりとよりなしあるこ
い筆のたりでも判ハ判
独い身ハ名をまいりきませぬ

せまるなり

智 あこれもつて師匠抵
如帝しまやせんしよ親しやうも
糸でつないで 隠(いん)居(きよ)の 薗(ハ)
ちんぢとかくしてハりんぢ
よめりざがりの 要(ヨウ)ゐめ

地

てんかうじや
今とびまする 親世音
みしやういぜんは 厳賞の
人 糸分 二 夜 竹のよのもぬさ[illegible]ぶし 二夜

むしゐて 廉 はむしゐ 法
ゐて ハ 半抵の 皆くいこ

見て思る

きのふも 明(アス)るも 富士
ふしんなり のすゞ法さ
なりは 店やちよつか ゥハ
穴のあくかどおやま菓や
菓を 盗(きり)めがうハ乃そら
やもりの 笑(ゑ)が 曲(かん) 輪(ハ)中

かおひきうは
うきぬ孤乃わかすひ
いけとの莫れぞやく八あ
又増きれとの謡りあい
暫ぞめ乃雀ぞあぞつあざ
乱しよので でんちうじや
地
ようれいつぞほうもあじ ゑもゑうぶの句とかあうえ
きうしげあい
柳はうゐう 柳のま

鐵砲 秋日和
我夜半のおもひ根
さりてもさしき数生気
あすものなして年よる夜
赤ゑくへ八増もじや一の冨
地
ころりつて
にえん流が京乃とうきんせ
極楽どしが 極の庵
物く文あとみそ 被剥系
文きよりうつと 延ちき尼

いんぎじやハ
のありさまをのがひのえあま
忠のころかへじやあろけまど
のたるし龜賣ルとしかいの
日かくらう洗もなく　だれ
大と猿でもあのようやない
わいつぎたらもとせてこそ
袖
もふ入ッて
鵜のおしげであがりぜん
てもかりけのひッたるし

やうハすう
わまこんやねいこ悩みんせより
定家の木かにくうハないい
家やすみをかまんあい
こちとらといえぐ大ふ春
露うちたまんめんと生
作り花こ
地
どうしやくおや
月ふ村を花よ程
け花ゑみせてひきんしめ
だいて移るとも失吹行

お
おくとのろくじまくのろよ
おもう月とつけもやてなぐさみ
地
いやそや是ハつし何ンどや
平家也
こあゆしさ
をいが花のかくじやいの
もうかしげもえよふ気
陰へあがれとさまあまやと
糸の道ひき
地りしも恋しそうぞん
風斗りみてとこやいのち
地
おのまあおおぶやまかわかかりい
翁せこ

さわぎざれ

あらくと見て立ツ旅すゝめ
牛のかゝ○ふと橋のぢざ
りんきがたそていで面目ない
一どゝ見ぬのもたりけのこち
京れやア。(ふまはりせ)ほるがのやア(きるの湯れていと)塔のやア
きハまつて　(金仏こうのていと)
かゝ○うせじやあわあんの状
二おきめるとるまきめる

ひよいと見て縁が縁
尾川ぢすと魚乃牡
葉一つのまちや(とくり)祥かしや
かもの葉なまやすいとの

二の足ふんでる(ゆ)が
身代もよぶり猫も立
ぢうでも猫まちて盗
(りし)着やうくいと小判なく
大ぶまのう(言の事をつけるやうに)(方能灸代かうやくし)灸代こう

おもひいだす

けんこふで口すましぐさ
まつしく孝行ぐくその
たそかれけりや江戸の屋敷
牡くらかなんびまくいやら
きのよふなる海藻あつと

ようもあれる

わつてちや絵つてきく神紙
名老も流されとまうる衣
ざしきうずんずし御と郡ゆ

ときやうぬで二門ゑ
なみの清書ハ又おさんでいやさの
あいそ紙

雑

ちてふとく

あまく三なみハ紅師の日
江くじり書てまてまくし
ねつゼまみいもの外
つけそすゑとひてさう
いゝ伝きしかんよらしがえ

雑

あくぎりごてんのおい

まゐりたい

あまたならかよつ神
後家（「恵の母也」）ごの髪が来るがう
まんざらの銀よしぶもいや
耳（みゝ）なりなりきいて家
どんなとゝるごでおまふ玄
やんがそなまぐさ坊ンじやあら
（「どのやうなし」）

牠

何ンとせう

いのらしてすけてたぶかへ
かんがの太よかまれしの

此いしやどのもかべすべらせ
後家で無れも呪こうまで
つんさすりまハしゝすれ
数銀（ミヤけ）るがあくねようまで

牠

ますまやせぬ

姥（ぢい）よむしのかまして元
玉も つ徒（とん）でおぶく牠
おとゝまそんもう旅ごうしや
天神牠のおしして牠
一度（ど）つだめが菓（すゝ）まて家

牡　ゆーだろりりはあかじやない
氣とつけろ
牝　寺ぐ　寒ぐこがせ　関東花
絵　東花のせきだしひ
松　ハりしより　こさはまそ
ら　おのおろ　寒花　かげんもろこもと
車　つくだ　目をつけ
牡　帯　ゆらまぬう　解あるう
　　ゆいのてひと
叶ふまる　ぬれ花ん　志よともいつまぬ　富士
　　やのかろてえもんだせ
面二

森　ちりでもちるまでしりの
すまやすまぐ　酒がいろぬの
ちなぐ　つがうとなぐるなよ
と　花の　会仏すると　ひ
牝　ちいが　花といひしうらせ　花乃かく　な事
そらとろう
やまそまた　鶯しぬぐるひ
切りが　中毛切こ　きよろつと花とぐし
面行ざ　くらあがらりん
傘かせじやあろりんけじやう

和玉とり此そこが志か
天氣しやうしよぞまつり志
とりもふくり
大八ひかた埒やかず
田ごん乃なし ぬ鳥ゑ山
儀侍 所 矣 人名
慈が今でハしやくせん慈
い生き鳥めハこちとがふ
死ンごのよんごの生きこの
ちりふすり 本二部 元食者 後とりよくるし

牠

牠

合てのち ごこ小豆めし
四どのくきどくしてこそこ云
南無阿彌陀佛祐天殿
寺まゝ歳のまいりしか
ひとりしやくしあしい風
「一人子死するとも」
おおおさつまい今ぬるこ髮此ぞこ
きみがまるい
ふぐりさげても 鐘乃下
これ寝と 突や聲の夜
矢さんれハけがのりとへ行
「大夫殺のてい」

あんまりなつく　猫(ねこ)性
何をんでおじやハ見えぞんまま
まぐ　盗人のいんだ　諺
かのまいの
ひぐりがるまやまゐらかうきさ
「海也」
まんざいとくいとゝくとく
「万歳也」
おもにたらとそゑかし
まびまときうすをれ
あくことかくどふゆしこの
とりゆへど

ぬ
いしやのまゐ分ハちられさじ
まいりじやみして寄らかき
山ぶのくしへたしまりの
「山体也」
あくごへ十日　よめでこひ云
「九日糸大火ゑ事也」
ひざへさつると口海波まづまそ忠
「子丸のうつ也」
ごこもうを
ぶまゐびのぐんに心中れぐん
たくるのたぐがゑんまよもなう
おとしなまやこそあくとうと
かいさんきうしまいんまん
「十月十六日東殿なる」

あの氏老さゆふまれかいの
さんまいなすにあせかいて
是が一あのたばこかの
もしまてろ
女がうかヲヽ婦かヲヽ
うきこ世乃ぎりもつきぬさ
屡にしけてでなもこけて
背中が衣十八身
あぶるげのないかく松なし

かざかいで

[illegible]

乳子買かく此まわい日

小僧[illegible]で里ごくろ

うろくうぎやくかざかいでせ陳ゆるがちゑ

馬もとしねり[illegible]

いやしくまちおいてくまこ

[illegible]

ついてくる

せん[illegible]り[illegible]と

きさしやと[illegible]

[illegible]

いやしくバンドで[illegible]のら

きそ[illegible]せ[illegible]里[illegible]がいつそいそ

足生めツかなしかひが

[illegible]

うしらゆる

新以此切位[illegible]の言

ひのとどうよみ此[illegible]

[illegible]があがるとゆ[illegible]

へて ひかすゆやのあかりがこ

日 [illegible]けつく[illegible]

きがかゝる

一本ぐらよ　あるそ
こそぞゆるもぐがよびゆるぐ
かにしるまやあかうしる
まごまもぶんじさせて見や
死のよるかかじやいのまいの
心中よせし也

かしいる所

いるるるゑ乃手作るてん
竹の根といひ現世といひ
「うまずの女竹の根かりといへだ也」

まるぐらかんかぬりやでも
「花」
こまハいりまでふるりがし
あまバつむがとおる夜角行
まのあきなげき也

ぞうしても

後家とぐけ四世ろまやあい
後生のみちし極女乃ゆ
「うめしうとあ中のよさへもつけの四と俗よりだこ」
もりけの四ハ万
二本きめらしく氣もこめる
是がさいまバまがさつる

だくくわう

をどりわりすりがふくの袂
一まりみちの東風
あれもしれ乃おにうし
くハ色かるかやが花さく
よいうしろ姿がくぬけ東り

かうくろ

みぶ乃藤じやがさびれどの
いのちやろうがひまやろう
でんしのわとぐ分でん

袂くりけてうそつきや
青乃君んまも君ひとよ

あさけない

ゑれて東さくイいそ國の状
谷をぬめことは君んまあれ
よみ虞りやのつらさごし
とうりふりけてくひづめ
川泉よ二夜さねましの

なとくころ

がおしい男てし鼠がない

詞 走もさねとしかもや何じや
ぞまことふくらぶん弟ふくの
ハ らうりのさやのぬくいつ
地ぞ 生玉へのちとつけてこも
びつくりまさ
すつそま井戸へさくりふれ
なつてそえられ姉く
こなさハまおく孫介う
しそこうげへ八待とてそのう
なとじいつくし夜まる
よみ入のおうらもんし

詞 よろこびありやア、さいく
おもひゞす
ひゞろけまやアそあがくれ
宿ぐへしてもいじんまさ
あのいやめえアや死あしこ多
去月八せんよすのまうけ
とおしとけないせんじやなは
ちとかくたなげて笑せぬむ
「あげぶし

かゞおろし

あま程座りおかも同義ハないい
いたすもいまひよふもよふ
老まひろやつて嫁よ行か
今じや・ひげ「人参し」てとも六十日
おじやま一がワルガノ大坂の
あれも老ねのいりとクヲ丶

河ンとせう

ふるりめさるてたいかな志い



次
節菊どグんそさためしも名
そうしふのろうヲ入よう
「ままんなまてろうそと
みじやならいひつこよゆさいそく
てんのあさしハまセじやとふ
菊ふたとされさ「三百七十一せし
「盲の志すし

地

うまし
がな

「浮乳のたこし
ご泌志づいあそくいりけるい
まうきるとこふでとちつちれ
よめさへそしかやあうとなく
「まつりのたこ
るの行りりのまそてけいご

なぞくやまやいのおどりの下（猫とやすらう）
ちんまやのまわかくされ
地 さ河家で
じや どんぐりぬすまよう二河白道（京川丁のづし也絵あり）
日 一本むなさじのぬうるまい
八 どうやら酒代（さかて）松のあい
で 色いまくまじかんどうせぬ
日 喰なる御寶前
地で ふぐりのないえんめて居や
ちしのふ川

すまししらきあがり御掃ひあるい
せうろさうじしてあり茶あお
やとひ猫めがくるひけ
わのあしらげめがちやらハいの
板本やのまわかつうらぬ（勝の名ハ役所より出ず）
見ねどの氣ま入りくされだ
地
おましこへ
皆ちつくてりおりまてそう
御さき湯氣の一番叟（京の町ひろがりて表芸きさ）
松葉乃くまりたきまりひ（江戸とくすべるでいい）

さちやぬりみそもきりぬ
そくのざんげよかくのざんげ
（[illegible]）
尺とむないのが又いのう
（同しかさのおりしかが）
ひぐるい時よりんた女房
夜かくじて[illegible]
いかさ夏すつて什ぐ尼
菜のこ伽どのそつくぎく
そくさしをしてすぐめどの
いたましたりめにめんがくない

牠

牠

川ご川とずつるかな
ごらうじませい田種ろてい
あつまき鍋よとらぶさじや
これもやさがまろ一ぶる士ごうて脈
よろうもおろく
三万三千三百三十三躰
「大仏三十三万三千三百三十三躰の数
是こそホンの鍋魔鬼い
熊あ あすりみ比底門
かりうりのじや
とくがうそげアやかくも尼

一ッちんといやけのまん
蟻よびや肉がかうだしう
蒸鍋のやうまおさまろ世
茶を称ぞろ氣まひ浪人
たまくのむ
せうごびてまて人形さ
わが一ととり捏盛いひ
又あのあてしじや
「蜘蛛の巣のごとく
焼ぎよあそて画つろと
あくゆそ牛も淀じやめ

地 べうすと あれル 堂の椽
のきしたる
あざひねりて 鼻の下
きてくし 夷ハ 髭取
後家の方からいのちやあ
かんどう 親もぬ 女ハ ない
あげくの 恋が志やせん 恋
の伊さへ 坊ンが 三日坊
地 何ンと志よな何
けぬと人のかやハ 神も
神身ながらも 神しい 後家
まんまとまるい 出 栗橋
さすが 御高もおとぎの
雛くても 乳のむだうて
なあのぐんかの 死ぬるぐん
地 まぐるいなあ
どちらもどちら 女夫星
神もなし 小町ひつたろ
やッとしてうち 志てアイ
つとんとたねて 一九が九

湯（とう）治（ぢ）とかされおかゝツ松
（まがるとりあしぐやとこ）
かゝらずきふあぢかりの
枕
切てハよい匂ま同作恋く
まゝふもとり
かゝじけるくも御来市地
みやもと所の車よこ
あけてもやたりの神来
付うくもとりれないあるう
足からじや
ぬか味噌くハそ桓の根（ね）

ひかつたりのハ桂れ来
松原よくすぐれく
うくも有（う）卦（け）やかくも有（う）卦（け）
まきちらを
万日袋めつ法界
儀がおこるとをひ来
かづら（葛の輪へ）四つしたあまり水
いや花でハ（色里のこと）あ河でハ
花見りどりれかゝいまちよ
めつそうは

おそ桜

梅ちりてかなや　硯箱

おひしぶりとふ　銚子

のり物いしやの　衣掛

裏でちゞめて雪こうし

さり孫れあかさぬれ

さむいぞや

鉛ふいてふもやあ　鮑

礼つゞさめうとはゝく

あまさへ　雲ハひえの山

すゝきく
扇子の尻で和中散
まりまでひつくりたゝき鋏
ごふに砕くるくるが鶏
けふより
素をとくしするも浦の網
三味をとられて三味の氣
弟子すくしもあやげく
大井川でもひざくら
あきよりかくがよいやうらし



ずつと也く
乳ぐるまよもせて三く可愛
情なるまゝりすこ刃がまゝ
身つき町しじや錦拍
鳴戸の年もさかりし合
笑ひぬりして牛蒡売
すゝろくろ
白粉をまとんと魁姑
蕎でふとうるもせろ
肩が継おツきあッすぐ

まつくろか
ものは生まれてまだ坊主の前
宮まれて後家の蓋
十年りは生て笑へ
ひまがない
「鞍の神」でもまあ返りや
又ぶぞうでも大きん日
にしじゃ毎年織せう
いや餅つきのひっちゃくを
扇とうれ出ざる物

ひります
一もつ此を後家の出
戸柄の蝋がのうりうし
ちゆうちんうつよりあり此前
ひりりおきとそじ尾とん
火桶なしじゃのかつてこの
なとつくる
かうしぐるまかうかきやぶり
こいつ産ごとて血の家
とて「彰」「廁」山平金寺

まあくと丸車で桂馬れって
入ルよのしや
貧一無な作れの二
下で係をが公ゆれ揚
そうめんすらゆれ汁
ちゃといらへぞうしれ如
口坤しい
ふぐりさげてしまぬ口戸
物ちぐ松の一つ買
背中しは籠とおいの菓

ぞりや賣とハそぞてぬる
寺積はさへ宰人ハ
つまぐらて
秋程猫ひんぞゆり屑
護摩めがでまのさい御
女史が花よよい異じやの
知口まで来てあらぞ急
ゆきくは
あしさぶくやもも無濃同
下女としまへてむどいぞよ